

1995年1月17日5

時46分。神戸市議会議員、浜崎為司氏は、神戸市長田区の自宅にいた。うなる轟音を上げて家が激しくねじれ、揺さぶられ、動くことすらできない。ようやく揺れが収まり、家族の安全を確認したあと、外に出てみれば――。

視界に入ってきたのは2階が落ち、ぐしゃりとつぶれた住宅。あの家もこの家も、倒壊。改築直後だった自宅も間柱に大きな亀裂が入り、事務所は全壊。震災後の統計によれば、長田区の倒壊率は6割を超すほどだった。

「都市機能が崩壊し混乱を極め、走り回る3日間でした。公的な助けがくるのは災害発生から3日を過ぎてから。せめてその間は救出、食料調達などをコミュニティが自前で行えなければ

いう。

地区の消防団分団長でもあった浜崎氏は団員とともに、倒壊した家屋から人を救出し続けた。瓦礫の中からようやく12人、助け出したがそのうち5名は死亡。遺体は毛布にくるみ、校庭に安置するのがやっとだった。

「火災も発生後すぐに、見つけた人がすぐ消し止めるのが大事。消防がく



神戸市議会議員 浜崎 為司氏

〈プロフィール〉  
はまさき・ためし 1948年生まれ、兵庫県出身。83年から神戸市議会議員として活動し、04年には同市議会副議長を務めた。自由民主党所属。現在、神戸市議会では、文教経済常任委員会、政治倫理確立委員会の委員であり、阪神水道企業団の副会長を務める。

## 被災後3日「コミュニティの自助が要に

るのを待っているのは旋風により手遅れなほどに被害が広がってしまう。炎にまかれ、成す術がない町と住民の姿が今も目に焼きつく。

この大被害の教訓から、神戸市では169の小学校区すべてでそれぞれに防災福祉コミュニティを組織した。250メートルごとに100トンの防火タンクを設け、火災発生時にはコミュニティのメンバーが消火活動を行えるよう訓練を

地域福祉センターで開くカフェでコミュニティのシヨンの機会をもうけ、顔の見える関係づくりを注力しているのだという。創設などの防災・減災対策を講じているぞうだ。だが、「住宅の耐震化率だけは、なかなかあがらない」と浜崎氏は頭を悩ませる。「マンションの

## 第7回「被災地神戸から」教訓を次世代へ

「悪い表情になった。「仮設住宅を市民の方々が元々住んでいた土地から離れた場所に作ってしまったのがよくなかった。住宅の再建資金がなく、コミュニティに戻れなくなってしまった人は少なくないんです。長田区では人口の約4割もが流出してしまい、未だに歩裏道に入れば空き地も多い。また、市の主導で震災後2カ月というあまりにも早い時期に都市計画を策定してしまったのも大きな反省点です。時間と費用がもったやかかって、住民の意向が十分に反映できる町づくりをすべきでした」。

こうした神戸の教訓を、次世代に他の都市に伝えたい。生かしてほしいと、強調した。

